

## 日本語教師に必要な特質・資質に関する国際調査

研究代表 縫部 義憲

## 第 I 部 全体的特徴と傾向

# 学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念

縫部義憲（広島大学大学院）

渡部倫子（岡山大学留学生センター）

佐藤礼子（日本学術振興会特別研究員）

小林明子（広島大学大学院生）

家根橋伸子（広島大学大学院生）

顔 幸月（台湾世新大学）

## 1 研究目的

2000年3月に文化庁から日本語教員養成のための新しい教育内容が提示され、反響を呼んでいる。しかし、この新しい教育内容の適切性を検証し、改良するためには、単に教育行政・学校・教師という指導する立場から日本語教師の専門性を構想するだけではなく、日本語を学ぶ学習者側からも望ましい教師像を明らかにし、両者を調整し総合化する作業も必要である。そこで、本論は、学習者側からの視点に着目し、日本語学習者はどのような教師を望ましいと考えているのかを質問紙法によって探る。調査で用いた質問項目の特徴は、学習と成長を促進する教師の行動・態度を、教室内での教師の行動特性（characteristics of behaviors）、すなわち教師は教室内で何をしているか、教師は学習者にどのような態度で接しているか、という観点から解明しようとしたことである。本論では、このような教師の促進的行動・態度という観点から、日本語学習者が考える「優れた」日本語教師の行動特性の特徴を分析することを目的とする。

また、本論の目的を達成するためには、国内及び海外の日本語学習者を対象として調査することが必要であるが、調査では主として海外で日本語を学ぶ学習者を対象とすることにし、中でも日本語学習者の多い国・地域を選んで対象とすることとした。

## 2 先行研究

「優れた」外国語教師はどのような人物か、という教師の性格特性に関する研究は1970年代前半までよく行われたが、それ以後は「優れた」外国語教師は教室内で何をしているか、教師は学習者にどのように接しているか、教師は学習者及び学習者同士がどのように相互交流をしているか、という外国語教師の行動・態度に関する研究が主流となってきた。

森川（1993）は、Moskowitz（1976b）が作成した質問紙を用い、国内（広島県内）で日本語を学ぶ就学生・留学生・一般外国人を対象として、「優れた」日本語教師の行動特性に関する調査を行った。得られたデータに因子分析を行った結果、「学習者への配慮」、「教えることへの積極性」、「教授法に関する知識と実践能力」、「日本語以外の背景知識」、という4因子が抽出された。この結果から、「優れた」日本語教師の行動特性には、教授法の他

にも、学習者への配慮や積極的な態度などが挙げられることが示唆された。しかしながら、森川の調査では、学習者に日本語のネイティブ教師を評価させたため、日本語知識・日本語力に関する項目が排除された。

同じく、国内で学ぶ日本語学習者を対象とした調査に、宮崎（1987）がある。宮崎は国内の留学生を対象として「日本語教師にとって必要不可欠な条件」について調査した。その結果、「楽しい授業・学習者に応じた柔軟な授業ができること」が最も重視され、次いで「日本語教師の日本語力（目標言語の知識・技能・運用能力）や広い教養（日本事情・世界事情の知識）」が求められ、第3に「人間的優しさと教職経験」が求められることを示唆した。

以上の先行研究では、日本国内（目標言語使用環境）で学ぶ成人学習者（留学生や一般外国人）を対象とした調査であったが、海外で日本語を学ぶ学習者を対象としたものに、縫部他の一連の研究がある。縫部他（2005）はニュージーランドの中等・高等教育機関の日本語学習者を対象として、「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方を調査した。その結果、高校生も大学生も「優れた」日本語教師を同様の枠組みで認識していることが示唆され、その構造は次の6因子から成り立っていた。

- ① 第1因子： 授業の実践能力
- ② 第2因子： 専門的知識と教養
- ③ 第3因子： 教室の雰囲気作り
- ④ 第4因子： 学習者への配慮と教職意識
- ⑤ 第5因子： 指導経験と資格
- ⑥ 第6因子： 日本語力と文化的知識

このことから、「優れた」という評価の中核には、日本語教育に関わる専門的知識・理解・技能に加えて、分かる授業・楽しい授業・動く授業というどの教科の教師にも求められる授業の実践能力、他者と関わる力や他者への心配りというカウンセリング・マインドという専門性が位置づいていることが示された。

また、渡部他（2005）では、学習年数の長さによって1年未満、1年以上3年未満、3年以上の3つのグループに分けて分析した。その結果、学習年数によって学習者が教師に求めるものが異なることが示され、学習年数とともに、(1) 上昇して安定した傾向を示すもの（「教室の雰囲気作り」・「日本語力と文化的知識」）、(2) 上昇して下降するもの（「授業の実践能力」）、(3) 下降してゆくもの（「専門的知識と教養」・「学習者への配慮と教職意識」・「指導経験と資格」）に分けられた。さらに、佐藤・渡部（2004）では、学習意欲との関係が分析され、日本語学習への意欲の程度によって教師への期待が異なり、熱心な学習者の方が教師により多くを求めていることが示されている。

これらの研究は、海外で日本語を学ぶ学習者の持つ教師像を明らかにしようとしたものであるが、ニュージーランドの学習者のみを対象とした調査にとどまっており、結果を日本語教員養成に還元するには、対象を異なる国や地域に増やして先行研究の結果と比較検

討することが必要である。そこで、本論では、縫部他（2005）と同様の調査手法を用い、対象となる国や地域を増やして調査を行った。

### 3 調査概要

#### 3.1 調査目的

調査の目的は、学習者が考える、「優れた」日本語教師の行動特性を実証的に明らかにすることである。また、対象国によって、「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念にどのような違いがあるかも検討する。

#### 3.2 調査対象者

7つの国と地域（ニュージーランド、タイ、韓国、中国、ベトナム、台湾、アメリカ）、19大学の日本語担当教師に郵送で調査を委託し、集団形式で質問紙に回答を求めた。アメリカの有効回答は24名であったため、今回の分析からは除外した。また、未記入が含まれた回答紙を除外した結果、6カ国、18大学、1441名のデータが分析対象となった。調査対象者については表1を参照のこと。

表1 調査対象者

| 国名       | 調査校<br>(校) | 調査人数<br>(名) | 有効回答数<br>(名) | 有効回答率<br>(%) | 性別 (名) |      |
|----------|------------|-------------|--------------|--------------|--------|------|
|          |            |             |              |              | 男      | 女    |
| ニュージーランド | 3          | 331         | 269          | 81.26        | 108    | 161  |
| タイ       | 4          | 318         | 265          | 83.33        | 58     | 207  |
| 韓国       | 3          | 342         | 296          | 86.54        | 75     | 221  |
| 中国       | 4          | 308         | 269          | 87.33        | 68     | 201  |
| ベトナム     | 3          | 247         | 189          | 76.51        | 23     | 166  |
| 台湾       | 1          | 171         | 153          | 89.47        | 30     | 123  |
| 合計       | 18         | 1717        | 1441         | 83.93        | 362    | 1079 |

#### 3.3 調査期間

調査は、2004年11月～2005年6月の間に対象国で実施した。

#### 3.4 調査方法

調査は質問紙法で行った（質問項目は本稿末の「資料」を参照）。Moskowitz（1976a）は、大学生を対象とした外国語の授業を観察し、教室内で教師はどのように振舞っているか、どのような行動を取っているか、学習者とどのように相互交流しているか、を記録し、

それらの代表的で主要な教師の行動・態度を抽出している。また、Moskowitz (1976b) は、主に教師を対象にして理想的な外国語教師像および実際の優れた外国語教師に見られる特徴をインタビューによって収集し、得られた 110 項目をもとに教師や高校生を対象とした質問紙調査と因子分析を行った。その結果、36 項目からなる外国語教師が備えるべき行動特性の質問項目を作成した。本調査では、この 36 項目をもとに日本語教育にふさわしい項目を加えたり、外国語としての日本語教育に合致しないと考えられた項目を削除したりして、合計 41 項目から成る質問紙を作成した。なお、各国語版の翻訳にあたっては、日本語から外国語に翻訳し、再度それを日本語に訳すバックトランスレーションを行い、翻訳の適確性を確かめた。

調査対象者は、「優れた」日本語教師が備えているべきだと思うかどうかを、41 項目それぞれについて 4 件法 (1=全く当てはまらない~4=非常に当てはまる) で評価した。さらに、フェイスシートに、性別、母語、日本語能力、日本語学習歴、日本語学習意欲、渡日経験の有無と滞在期間等の記入を求めた。

### 3.5. 分析方法

本研究では、探索的因子分析によって「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念を検討したうえで、SPSS for Windows 10 と Amos4 を用いて構造方程式モデリングという統計処理を行い、対象国ごとの違いを比較検討する。構造方程式モデリング (共分散構造分析) とは、先行研究や探索的な調査をもとに分析者自身が因子のモデルを作成し、作成したモデルが実際のデータをどの位うまく説明しているかを検討することができる方法である (豊田他、1992)。そのため、探索的な因子分析と異なり、モデルを自由に作成することができること、同一のモデルを用いて複数のグループの比較が可能であること (多母集団の同時分析)、などのメリットがある (三浦監、2004)。

## 4 結果と考察

### 4.1. 「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念

まず、「優れた」日本語教師の行動特性がどのような構成概念を有しているかを調べるために、質問項目 (41 項目) に対する全員のデータに関して探索的に因子分析を行った。因子の抽出に最尤法・プロマックス回転を用いた結果、6 因子が抽出された。次に、因子負荷量が絶対値で.35 未満の項目を削除し、残った項目について再度因子分析を行った結果、30 項目が残り、最終的に 5 因子が抽出された (表 2)。

探索的な因子分析から得られた 5 因子は以下のように命名した。

第 1 因子は、[標準的な日本語を話すことができる] [日本語教師として十分な訓練を受けている] [教えることに熱心である] など、教師の日本語能力、日本語教師としての知識、プロの日本語教師としての教職意識などの項目で構成されていたため、「日本語教師の専門性」と命名した。

第2因子は、[修士号（又はそれ以上の学位）を持っている] [日本語の古典に関する十分な知識がある] [指導経験が長い] など、教師の学歴、教養、指導経験などの項目で構成されていたため、「指導経験と資格」と命名した。

第3因子は、[明るく、ユーモアがある] [自分、他者、人生について楽観的である] [暖かく、やさしく、思いやりがある] など、楽しい授業雰囲気を醸成する教師のパーソナリティに関する項目で構成されていたため、「教師の人間性」と命名した。

第4因子は、[学習者のニーズに対応したコース設計をする] [教室を和やかで、くつろいだ雰囲気にする] [多様な教授法、教材、視聴覚教具を用いる] など、コース運営や教室経営（class room management）を含むコース設計に関する項目で構成されていたため、「コース運営」と命名した。

第5因子は、[教室内において学習者に規律を守らせる] [学習者からの提案や考えを取り上げる] [授業がきちんと構成されている] など、実際に授業を行い、学習者と相互作用を行う際に求められる項目で構成されていた。そのため、「授業の実践能力」と命名した。

まとめると、学習者が考える「優れた」日本語教師の行動特性は、(1) 日本語教師としての専門性が高いこと（第1因子）、(2) 有資格者で教職歴を積んでいること（第2因子）、(3) 面白く、楽しい教室雰囲気を作るパーソナリティを備えていること（第3因子）、(4) コースを円滑に運営できること（第4因子）、そして(5) 学習者ときちんと関わり、授業の進め方に熟達していること（第5因子）、ということになる。日本語教師には日本語教師としての専門性や資格・経験だけでなく、楽しい教室雰囲気を作るパーソナリティ、コース運営、授業の実践能力という能力も潜在的な因子として認識されていることが示唆された。

本調査で得られた因子分析の結果と、本調査と同様の質問紙を用いてニュージーランドの学習者を対象とした調査を行った縫部他（2005）の結果とを比較する。因子に含まれる項目が異なるため、おおまかな比較となるが、縫部他で2因子に分かれていた「専門的知識と教養」と「指導経験と資格」は、本調査では「指導経験と資格」にまとめられた。また、縫部他で「学習者への配慮と教職意識」「日本語力と文化的知識」の2因子に分かれていたが、本調査では日本語力が日本語教師の専門性の中にまとめられ、「日本語教師の専門性」1因子となった。一方、縫部他（2005）の分析で得られた「授業の実践能力」は、本調査では授業時間内での実践能力とコース全体に関わるマネジメント力に分けられ、2因子「授業の実践能力」と「コース運営」となった。また、縫部他で得られた因子「教室の雰囲気作り」に含まれた質問項目（授業をおもしろくする、授業を和やかでくつろいだ雰囲気にする、ユーモアが分かる、楽しんで教えている）は、本調査では「日本語教師の専門性」「コース運営」「教師の人間性」に点在して含まれていた。教室の雰囲気の醸成に関わる項目は、教師としての専門性およびコース運営においても潜在的に含まれていると考えられよう。また、本調査では「教師の人間性」という教師のパーソナリティに関する因子が1つの因子として抽出された。

表2 探索的因子分析の結果

|                                 | 1      | 2      | 3      | 4      | 5      |
|---------------------------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| I 日本語教師の専門性                     |        |        |        |        |        |
| Q4 標準的な日本語を話すことができる。            | 0.670  | -0.025 | -0.017 | -0.003 | -0.037 |
| Q2 日本語教師として十分な訓練を受けている。         | 0.656  | 0.122  | -0.009 | -0.076 | -0.062 |
| Q3 教えることに熱心である。                 | 0.636  | -0.163 | 0.099  | -0.013 | -0.045 |
| Q33 日本語を正確に、且つ流暢に使うことができる。      | 0.519  | 0.087  | -0.081 | 0.216  | -0.061 |
| Q6 プロとしての自覚を持っている。              | 0.511  | 0.123  | 0.238  | -0.194 | -0.057 |
| Q12 外国語としての日本語教授法に熟達している。       | 0.507  | 0.165  | -0.119 | 0.083  | 0.108  |
| Q13 学習者が分からないとき、分かりやすく説明する。     | 0.429  | -0.225 | -0.014 | 0.115  | 0.312  |
| Q11 必要なら教科書に出ていないことも教える。        | 0.384  | -0.027 | -0.002 | 0.219  | 0.042  |
| Q10 日本語を1つの言語として客観的に分析することができる。 | 0.373  | 0.160  | -0.011 | 0.058  | 0.135  |
| Q9 楽しんで教えている。                   | 0.358  | -0.110 | 0.210  | 0.063  | 0.142  |
| II 指導経験と資格                      |        |        |        |        |        |
| Q36 修士号(又はそれ以上の学位)を持っている。       | -0.067 | 0.769  | 0.022  | 0.047  | -0.069 |
| Q35 日本語の古典に関する十分な知識がある。         | -0.010 | 0.606  | -0.030 | 0.149  | 0.009  |
| Q26 指導経験が長い。                    | 0.017  | 0.511  | 0.045  | 0.008  | 0.211  |
| Q30 日本語教育に関する資格を持っている。          | 0.267  | 0.496  | 0.034  | -0.050 | -0.012 |
| Q39 以前に外国語学習の経験がある。             | -0.040 | 0.436  | -0.067 | 0.316  | -0.015 |
| III 教師の人間性                      |        |        |        |        |        |
| Q5 明るく、ユーモアがある。                 | 0.146  | -0.018 | 0.602  | 0.037  | -0.087 |
| Q1 自分、他者、人生について楽観的である。          | -0.007 | -0.010 | 0.588  | -0.101 | 0.121  |
| Q21 暖かく、やさしく、思いやりがある。           | -0.066 | 0.053  | 0.465  | 0.104  | 0.184  |
| Q31 授業を面白く、楽しくする。               | 0.155  | -0.066 | 0.401  | 0.396  | -0.101 |
| IV コース運営                        |        |        |        |        |        |
| Q38 学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる。 | 0.031  | 0.126  | -0.026 | 0.555  | 0.030  |
| Q37 教室を和やかで、くつろいだ雰囲気にする。        | -0.040 | -0.005 | 0.415  | 0.448  | -0.024 |
| Q23 多様な教授法、教材、視聴覚教具を用いる。        | 0.167  | 0.114  | 0.014  | 0.379  | -0.015 |
| Q24 日本語以外のことについても相談にのってくれる。     | -0.138 | 0.151  | 0.235  | 0.324  | 0.139  |
| V 授業の実践能力                       |        |        |        |        |        |
| Q15 勤勉である。                      | 0.144  | 0.168  | 0.149  | -0.194 | 0.476  |
| Q28 大きな忍耐力がある。                  | -0.138 | 0.073  | 0.185  | 0.110  | 0.447  |
| Q14 学習者からの提案や考えを取り上げる。          | 0.167  | -0.080 | 0.025  | 0.194  | 0.415  |
| Q16 学習者の質問に喜んで答え、また質問に答えられる。    | 0.369  | -0.070 | -0.013 | -0.014 | 0.380  |
| Q41 教室内において学習者に規律を守らせる。         | -0.080 | 0.336  | 0.004  | -0.057 | 0.379  |
| Q19 授業がきちんと構成されている。             | 0.335  | 0.045  | -0.100 | 0.107  | 0.336  |
| Q18 学習者をほめたり、励ましたりする。           | -0.014 | 0.035  | 0.324  | -0.009 | 0.335  |
| 固有値                             | 8.83   | 2.23   | 1.57   | 1.13   | 1.04   |
| 寄与率                             | 29.44  | 7.45   | 5.23   | 3.76   | 3.47   |



## 4.2. 対象国による相違

次に、対象国によって、「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念にどのような違いがあるかを明らかにするため、ニュージーランド、タイ、韓国、中国、ベトナム、台湾の計6カ国について多母集団の同時分析を行った(表3)。表3における7つのモデルのうち、データに対して有効なモデル(共分散行列が正値定符号であるモデル)だったのは、モデル4とモデル7のみであった。この2つのモデルのうち、よりデータに適合している(AICの値が低い)モデル4を採用して解釈した。このモデル4は、因子構造、因子間の相関係数、各因子の分散は等値であることを示している。この結果、対象国によって、「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念に違いは無く、各因子の平均にのみ相違があることが分かった。6カ国で共通した因子構造を図1に示す。また、図1中の曲線で示した因子間の相関係数を表4に示す。

表3 多母集団の同時分析における適合度指標の比較

|                            | $\chi^2$        | <i>d.f.</i> | CFI          | RMSEA        | AIC             |
|----------------------------|-----------------|-------------|--------------|--------------|-----------------|
| モデル0:配置不変+強測定不変            | 7632.593        | 2765        | 0.970        | 0.035        | 8042.593        |
| モデル1:モデル0+共変動が等値           | 7767.284        | 2815        | 0.969        | 0.035        | 8077.284        |
| モデル2:モデル0+因子分散が等値          | 7742.047        | 2790        | 0.969        | 0.035        | 8102.047        |
| モデル3:モデル0+因子平均が等値          | 8071.835        | 2790        | 0.967        | 0.036        | 8431.835        |
| <b>モデル4:モデル1+モデル2</b>      | <b>7983.507</b> | <b>2840</b> | <b>0.968</b> | <b>0.036</b> | <b>8243.507</b> |
| モデル5:モデル1+モデル3             | 8243.876        | 2840        | 0.966        | 0.036        | 8503.876        |
| モデル6:モデル2+モデル3             | 8166.389        | 2815        | 0.967        | 0.036        | 8476.389        |
| <b>モデル7:モデル1+モデル2+モデル3</b> | <b>8464.930</b> | <b>2865</b> | <b>0.965</b> | <b>0.037</b> | <b>8674.930</b> |

CFI(比較適合度指標: comparative fit index): 0~1までの範囲をとり、完全にデータに適合しているモデルは値が1になる。  
 RMSEA(平均二乗誤差平方根: root mean square error of approximation): 値が0.1以上のモデルは当てはまりが悪いと解釈できる。  
 AIC(赤池情報量基準: Akaike's information criterion): 複数のモデルを比較して最良のモデルを選択するときに使用する指標で、値が小さいモデルほど優れていると判断される。

表4 因子間の相関係数

|             | I   | II  | III | IV  | V   |
|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|
| I 日本語教師の専門性 |     | .42 | .75 | .71 | .88 |
| II 指導経験と資格  | .42 |     | .41 | .58 | .55 |
| III 教師の人間性  | .75 | .41 |     | .98 | .83 |
| IV コース運営    | .71 | .58 | .98 |     | .82 |
| V 授業の実践能力   | .88 | .55 | .83 | .82 |     |

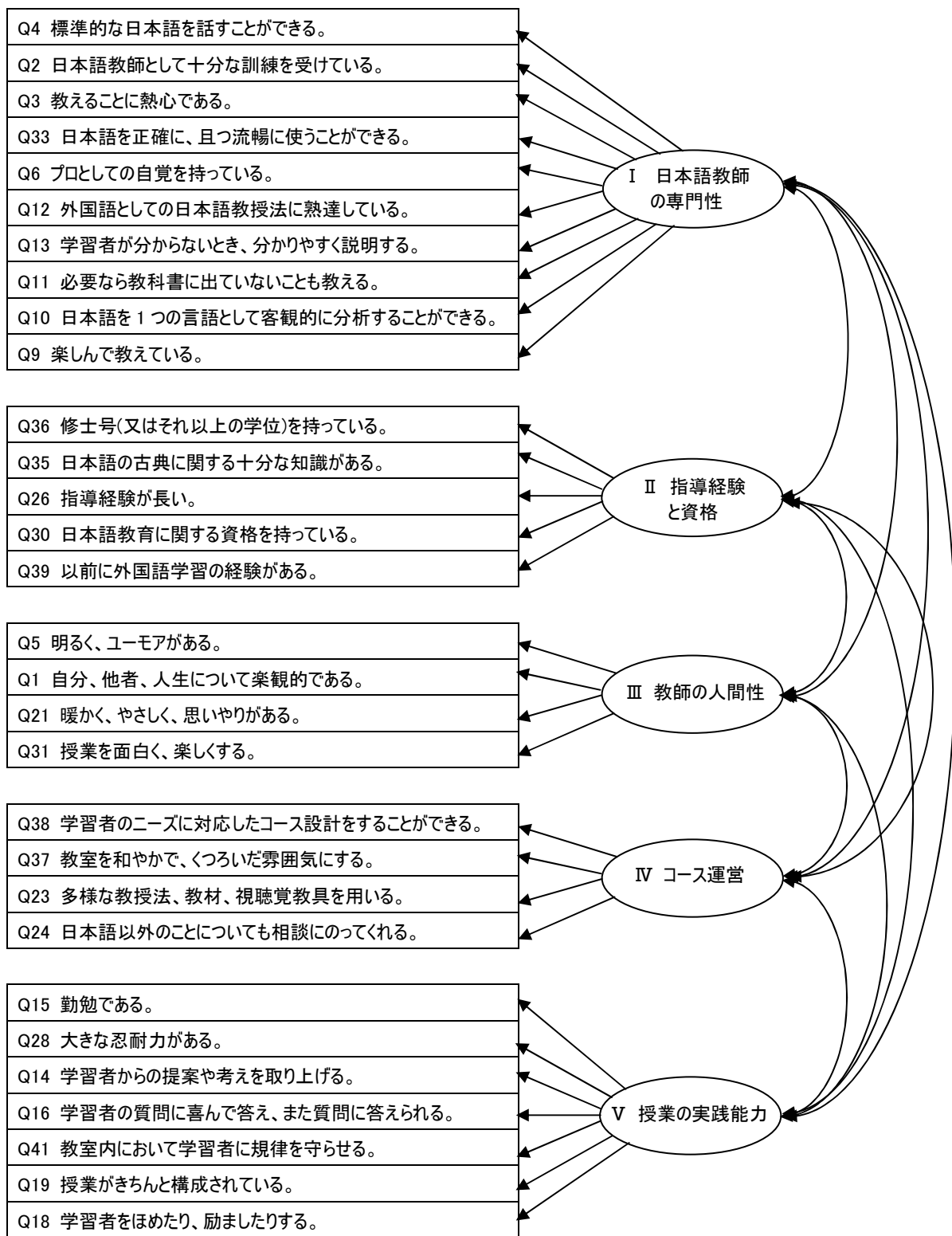


図1 「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念

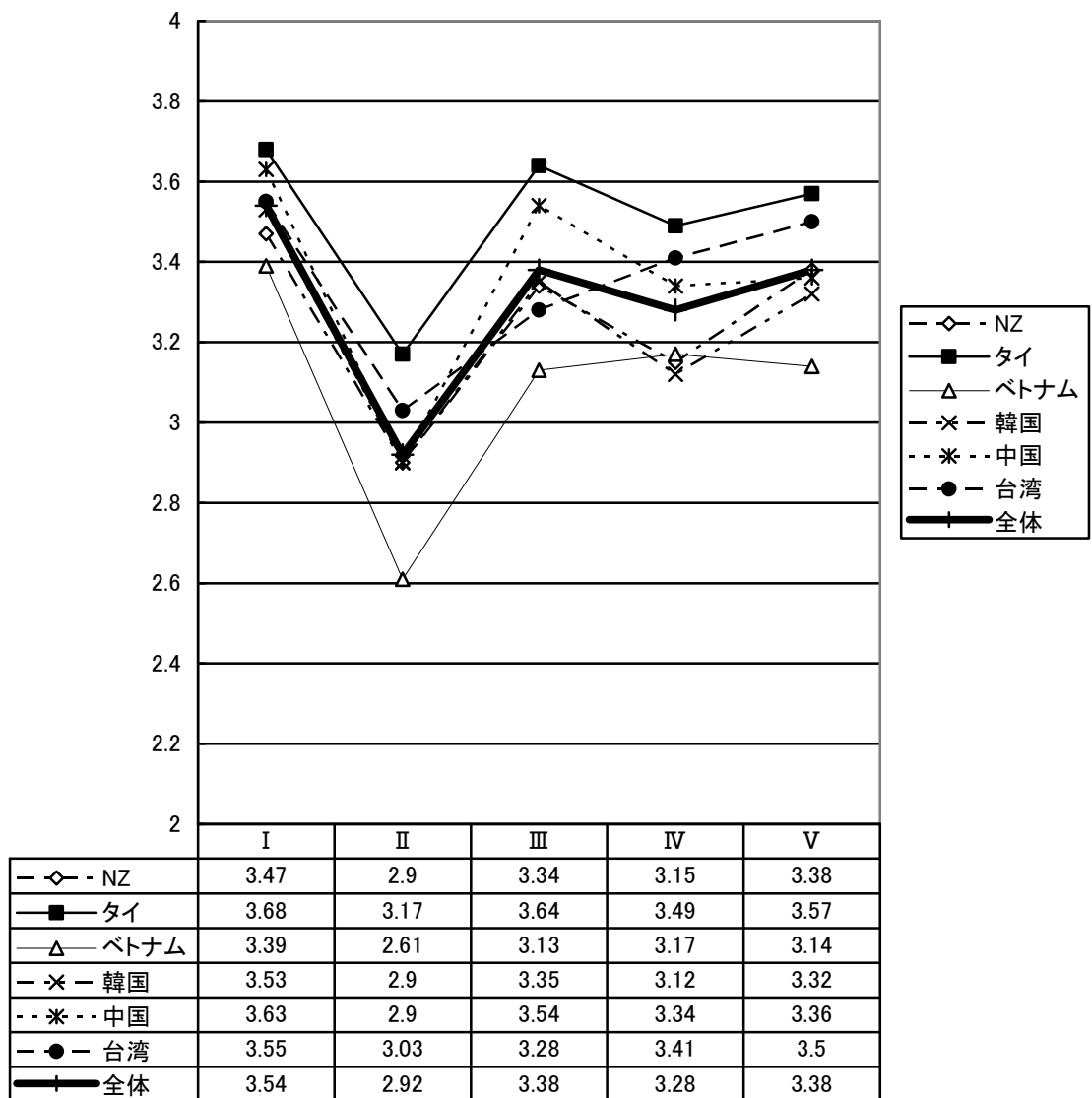


図2 各因子の平均値

各因子の平均値の違いを図2に、国別の因子の順位を表5に示す。図2から、「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方が、対象国によって異なることが明らかになった。すべての国に共通して最も高く評定された因子は「日本語教師の専門性」であった。一方、すべての国に共通して最も低く評定された因子は「指導経験と資格」であった。表4の相関係数を見ると、「指導経験と資格」とその他の因子との相関が比較的弱いことが分かる。このことから、他の因子と比べ、あまり重視しておらず、学習者は、「指導経験と資格」を独立した要素として認識していると考えられる。

表5 因子平均の順位（国別）

|     | 全体          | タイ        | 韓国         | 中国         | NZ         | ベトナム       | 台湾         |           |
|-----|-------------|-----------|------------|------------|------------|------------|------------|-----------|
| 第1位 | I 日本語教師の専門性 |           |            |            |            |            |            |           |
| 第2位 | III 教師の人間性  | V 授業の実践能力 | III 教師の人間性 | III 教師の人間性 | III 教師の人間性 | V 授業の実践能力  | IV コース運営   | V 授業の実践能力 |
| 第3位 |             |           | V 授業の実践能力  | V 授業の実践能力  | V 授業の実践能力  | III 教師の人間性 | V 授業の実践能力  | IV コース運営  |
| 第4位 | IV コース運営    | IV コース運営  | IV コース運営   | IV コース運営   | IV コース運営   | III 教師の人間性 | III 教師の人間性 |           |
| 第5位 | II 指導経験と資格  |           |            |            |            |            |            |           |

国別の因子の順位を示した表5からも、すべての対象国に共通して最も高く評価された因子は「日本語教師の専門性」で、すべての対象国に共通して最も低く評価された因子は「指導経験と資格」であることが分かる。「教師の人間性」、「コース運営」、「授業の実践能力」の平均値の順位については対象国によって異なることが分かり、ベトナムや台湾では「優れた」日本語教師が備えているべき特性として「コース運営」がより高く認知されていた。対象国ごとの特徴と傾向の分析は、第II部を参照のこと。

## 5 おわりに

本研究では、ニュージーランド、タイ、韓国、中国、ベトナム、台湾の6つの国と地域、18大学から得られたデータを対象として、「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方を調査した。その結果、どの対象国においても「優れた」日本語教師を同様の枠組みで認識していることが示唆され、その構造は「日本語教師の専門性」「指導経験と資格」「教師の人間性」「コース運営」「授業の実践能力」の5因子から成り立っていることが明らかとなった。つまり、「優れた」日本語教師という評価には、日本語教師としての専門性や資格・経験に加え、コーディネーターとしてのコースを運営する能力も関わると認識されているといえよう。そして、授業において学習者と関わる力や面白く、楽しい教室雰囲気を作ることができるパーソナリティを備えているというカウンセリング・マインドが、「優れ

た」日本語教師という評価に位置づいていることが示された。

今後の課題を以下に示す。まず、本論の目的は、日本語学習者が考える「優れた」日本語教師の行動特性の特徴をできるだけ多くの国や地域で学ぶ学習者を対象に明らかにすることであった。そのため、全体を網羅するモデルを提案し、各国の特徴については詳しく述べることができなかつた。今後、各国の日本語教育の特徴を踏まえて、国や地域ごと、およびフェイスシートで求めた学習者の背景ごとの分析や解釈を進める予定である。

次に分析方法についてである。今回採用した 5 因子解の他に、4 因子と 6 因子についても検討を行ったが、5 因子解がもっともよいモデルであるという結果であった。しかし、5 因子解では、相関係数の一部が非常に高かつた。より信頼性の高いモデルを提案するには、今後、モデルのさらなる検討が必要である。

最後に、本調査では優れた日本語教師の特質や資質を明らかにする方法として学習者の意見を収集する方法を取ったが、教師像を多面的に分析するには他にも、教師や研究者の教師像の認知を探る方法、実際の教授行動を分析する方法が挙げられる。これらの研究結果をつき合わせてゆくことが求められよう。

#### 【引用文献】

- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫（1992）『原因を探る統計学 共分散構造分析入門』講談社。
- 三浦省五監修（2004）『英語教師のための教育データ分析入門 授業が変わるテスト・評価・研究』大修館書店。
- 宮崎茂子（1987）「特集 教師に望む 学習者の立場から コースデザイン」『AJALT』10 号 6-30.
- 森川千里（1993）『「よい日本語教師」の特性に関する研究』1993 年度広島大学卒業論文
- Moskowitz, G. 1976a The classroom interaction of outstanding foreign language teachers. *Foreign Language Annals* 9: 135-143, 146-157.
- \_\_\_\_\_ 1976b Competency-based teacher education before we proceed. *Modern Language Journal* 60: 18-23.
- 縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子（2005）「日本語学習者が考える「優れた」日本語教師の行動特性に関する調査—ニュージーランドの大学生を対象として—」『無差』第 12 号 京都外国語大学日本語学科研究会 93-99.
- 渡部倫子・佐藤礼子・家根橋伸子（2005）「日本語学習者が求める日本語教師像と学習歴との関係—ニュージーランドの学習者を対象に—」『2005 年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 216-217.
- 佐藤礼子・渡部倫子（2004）「ニュージーランドの日本語学習者が求める日本語教師像—教師の行動特性と学習意欲の観点から—」『2004 年度日本語教育学会中国地区研究集会予稿集』日本語教育学会 4-9.

「資料」

|                                     |   |   |   |
|-------------------------------------|---|---|---|
| 全く当てはまらない・あまり当てはまらない・当てはまる・非常に当てはまる |   |   |   |
| 1                                   | 2 | 3 | 4 |

|                                   | 全く当て・あまり当て・当てはまる・非常に<br>はまらない はまらない 当てはまる 当てはまる |   |   |   |
|-----------------------------------|---|---|---|---|
| 1. 自分、他者、人生について楽観的である。……………       | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 2. 日本語教師として十分な訓練を受けている。……………      | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 3. 教えることに熱心である。……………              | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 4. 標準的な日本語を話すことができる。……………         | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 5. 明るく、ユーモアがある。……………              | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 6. プロとしての自覚を持っている。……………           | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 7. 異なる言語や文化に対する寛容性がある。……………       | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 8. 世界経済・国際問題について幅広い知識がある。……………    | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 9. 楽しんで教えている。……………                | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 10. 日本語を1つの言語として客観的に分析することができる。…… | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 11. 必要なら教科書に出ていないことも教える。……………     | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 12. 外国語としての日本語教授法に熟達している。……………    | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 13. 学習者が分からないとき、分かりやすく説明する。……………  | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 14. 学習者からの提案や考えを取り上げる。……………       | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 15. 勤勉である。……………                   | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 16. 学習者の質問に喜んで答え、また質問に答えられる。…………… | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 17. 言語学の基礎的な知識がある。……………           | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 18. 学習者をほめたり、励ましたりする。……………        | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 19. 授業がきちんと構成されている。……………          | 1   | 2 | 3 | 4 |
| 20. 学習者の能力に合わせて授業を進める。……………       | 1   | 2 | 3 | 4 |

|   | 全く当て<br>はまらない | あまり当て<br>はまらない | 当てはまる | 非常に<br>当てはまる |
|---|---------------|----------------|-------|--------------|
| 21. 暖かく、やさしく、思いやりがある。……………1                             | 2             | 3              | 4     |              |
| 22. 学習者に日本語で話すことを促す。……………1                              | 2             | 3              | 4     |              |
| 23. 多様な教授法、教材、視聴覚教具を用いる。……………1                          | 2             | 3              | 4     |              |
| 24. 日本語以外のことについても相談にのってくれる。……………1                       | 2             | 3              | 4     |              |
| 25. 学習者の母語（又は媒介言語）で説明することができる。……………1                    | 2             | 3              | 4     |              |
| 26. 指導経験が長い。……………1                                      | 2             | 3              | 4     |              |
| 27. 日本の文化・習慣・歴史について幅広い知識がある。……………1                      | 2             | 3              | 4     |              |
| 28. 大きな忍耐力がある。……………1                                    | 2             | 3              | 4     |              |
| 29. 学習者の間違いを適切に訂正することができる。……………1                        | 2             | 3              | 4     |              |
| 30. 日本語教育に関する資格を持っている。……………1                            | 2             | 3              | 4     |              |
| 31. 授業を面白く、楽しくする。……………1                                 | 2             | 3              | 4     |              |
| 32. 達成度、熟達度など、目的に応じてテストが作成でき、その結果を統計的に解釈することができる。……………1 | 2             | 3              | 4     |              |
| 33. 日本語を正確に、且つ流暢に使うことができる。……………1                        | 2             | 3              | 4     |              |
| 34. 学習者が間違っても気まずい思いをさせたり、ばかにしたりしない。1                    | 2             | 3              | 4     |              |
| 35. 日本語の古典に関する十分な知識がある。……………1                           | 2             | 3              | 4     |              |
| 36. 修士号（又はそれ以上の学位）を持っている。……………1                         | 2             | 3              | 4     |              |
| 37. 教室を和やかで、くつろいだ雰囲気にする。……………1                          | 2             | 3              | 4     |              |
| 38. 学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる。……………1                   | 2             | 3              | 4     |              |
| 39. 以前に外国語学習の経験がある。……………1                               | 2             | 3              | 4     |              |
| 40. 学習者の感情を受け入れる。……………1                                 | 2             | 3              | 4     |              |
| 41. 教室内において学習者に規律を守らせる。……………1                           | 2             | 3              | 4     |              |

## 第Ⅱ部 各国の特徴と傾向



# 学習者が求める日本語教師の行動特性（１） ーニュージーランドの大学生の場合ー

小林明子（広島大学大学院生）

縫部義憲（広島大学大学院）

近藤玲子（オークランド大学）

ジューン・レイン（マッセイ大学アルバニー校）

ミエコ・マッキネス（Auckland University of Technology）

## 1 調査の背景

ニュージーランドの日本語教育は 1965 年にマッセイ大学に日本語の学位課程が設けられたことに始まる。その後年々日本語学科を設置する大学が増加し、現在ではニュージーランドにある 8 大学中 7 大学で日本教育が行われている。2004 年の海外日本語教育機関調査結果によれば、ニュージーランド国内の日本語教育実施機関数は 259 校（初・中等教育機関 246 校、高等教育機関 12 校、学校教育以外の機関 1 校）、学習者数は 28,317 名（初・中等教育 26,012 名、高等教育 2,293 名、学校教育以外 12 名）であった。初等・中等教育機関で学ぶ学習者が多いことが特徴で、大学生の中には初・中等教育時代から長期間日本語を学んでいる学習者も多い。このように日本語教育が盛んな理由としては日本との経済関係が挙げられる。1998 年の時点で日本はニュージーランドの第 2 の輸出相手国であり第 3 の輸入相手国でもある。このような両国の関係から大学などの高等教育機関においては将来の就職のために日本語によるコミュニケーション能力習得を目指す学習者が多い（国際交流基金 <http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/newzealand.html>）。

## 2 調査の概要

### 2.1 調査の目的

本稿の目的は、以上のような特徴を持つニュージーランドの日本語学習者が求める日本語教師の行動特性を明らかにすることである。

### 2.2 調査対象者

調査対象は、ニュージーランドの 3 大学に在籍する学習者 331 名で、欠損値を除外した結果、269 名のデータが分析対象となった。有効回答率は 81.26% である。調査対象者となった 269 名の属性を表 6 に示す。表 6 から、学習歴は平均 2 年 6 ヶ月で、滞日経験有りの学習者は 69 名、無しの学習者は 200 名であった。

表6 調査対象者の属性

| 母 語  |     |     |     |     |      |       |       | 性 別  |      | 学 習 歴 | 滞 日 経 験 |      |
|------|-----|-----|-----|-----|------|-------|-------|------|------|-------|---------|------|
| 中国語  | 韓国語 | 英語  | 台湾語 | タイ語 | ロシア語 | スペイン語 | フランス語 | 男    | 女    | 平均    | 有       | 無    |
| 140名 | 64名 | 56名 | 5名  | 1名  | 1名   | 1名    | 1名    | 108名 | 161名 | 3年6ヶ月 | 69名     | 200名 |

### 2.3 調査の方法

各調査対象校で共同研究者・調査協力者が授業の一部を割いて調査を実施し、その場で回収する方法を採った。調査用紙と回答方法については、第I部「3.4 調査方法」及び末尾にある「資料」を参照のこと。

## 3 結果と考察

ニュージーランドと全体の因子ごとの平均を図3に示す。

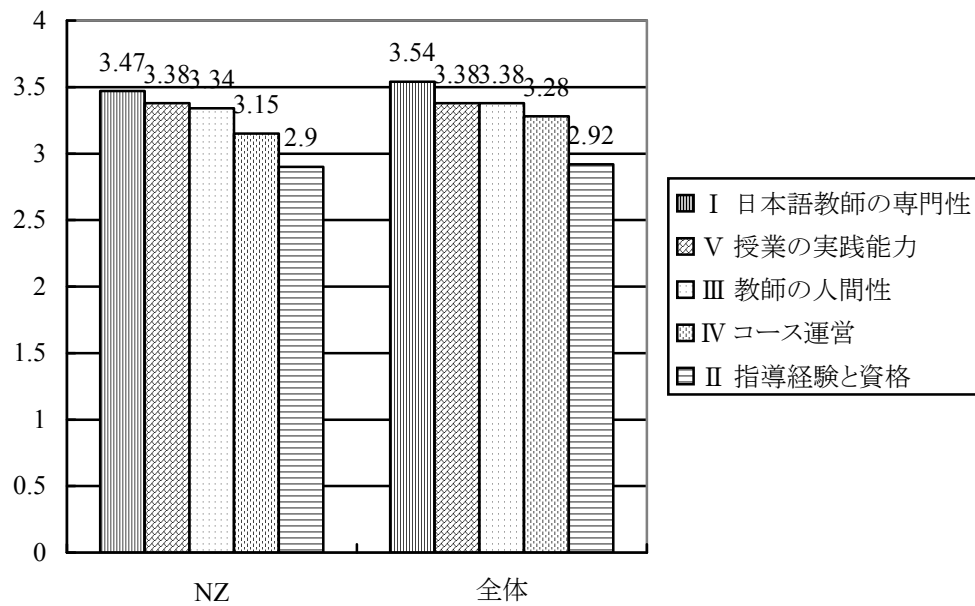


図3 ニュージーランドと全体の因子の平均

図3から、ニュージーランドの5因子のうち、最も平均が高かったのは、「I 日本語教師の専門性」(平均=3.47)であった。次いで平均の高い順に「V 授業の実践能力」(平均=3.38)、「III 教師の人間性」(平均=3.34)、「IV コース運営」(平均=3.15)となった。最も低かったのは、「II 指導経験と資格」(平均=2.90)であった。このことからニュージーランドの日本語学習者は、教師に高い専門性や指導能力を求めるとともに、明るさや優しさという人間性も重視していることが示された。一方、教師の指導経験や資格については専門性や人間性と比較してあまり重視していない可能性が示唆された。

この結果を全体と比較すると、ニュージーランドでも全体でも因子の平均が最も高かったのは、「Ⅰ 日本語教師の専門性」であり、最も低かったのは「Ⅱ 指導経験と資格」であった。このことから、ニュージーランドの日本語学習者も各国の日本語学習者とはほぼ同じ特徴を持っており、教師の指導経験や資格よりも専門性を重視していることが示唆された。

# 学習者が求める日本語教師の行動特性（２）

## －タイの大学生の場合－

家根橋伸子（広島大学大学院生）

高木裕子（実践女子大学）

馬場良二（熊本県立大学）

秋田英嗣（ワライラック大学）

大場美紀（タイ国立カセサート大学チョンブリ校）

Laddawan Strisawatphong（タイ国立カセサート大学附属学校）

### 1 調査の背景

タイにおける日本語教育は、1960年代より大学を中心に進められてきた。1980年代以降、高等教育では日本語講座開設校の増加及び大学院の設置が進み、また、中等教育における日本語教育実施校が増加している。2003年の海外日本語教育機関調査結果によれば、タイ国内の日本語教育実施機関数は274校（初・中等教育機関165校、高等教育機関82校、学校教育以外の機関27校）、学習者数54,884名（初・中等教育17,516名、高等教育22,273名、学校教育以外15,095名）であった。タイでは、日本語は人気の高い外国語の一つであり、中等教育や高等教育段階の学習者が多いことが特徴とされる（国際交流基金 <http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/thailand.html>）。

### 2 調査の概要

#### 2.1 調査の目的

本稿の目的は、以上のような特徴を持つタイの日本語学習者が求める日本語教師の行動特性を明らかにすることである。

#### 2.2 調査対象者

調査対象は、タイの4大学に在籍する学習者318名で、欠損値を除外した結果、265名のデータが分析対象となった。有効回答率は83.33%である。調査対象者となった265名の属性を表7に示す。表7から、学習歴は平均1年7ヶ月で、滞日経験有りの学習者は19名、無しの学習者は246名であった。

表7 調査対象者の属性

| 母語   | 性別  |      | 学習歴   | 滞日経験 |      |
|------|-----|------|-------|------|------|
| タイ語  | 男   | 女    | 平均    | 有    | 無    |
| 265名 | 58名 | 207名 | 1年7ヶ月 | 19名  | 246名 |

#### 2.3 調査の方法

各調査対象校で共同研究者・調査協力者が授業の一部を割いて調査を実施し、その場で回収する方法を採った。調査用紙と回答方法については、第Ⅰ部「3.4 調査方法」及び末尾にある「資料」を参照のこと。

### 3 結果と考察

タイと全体の因子ごとの平均を図4に示す。

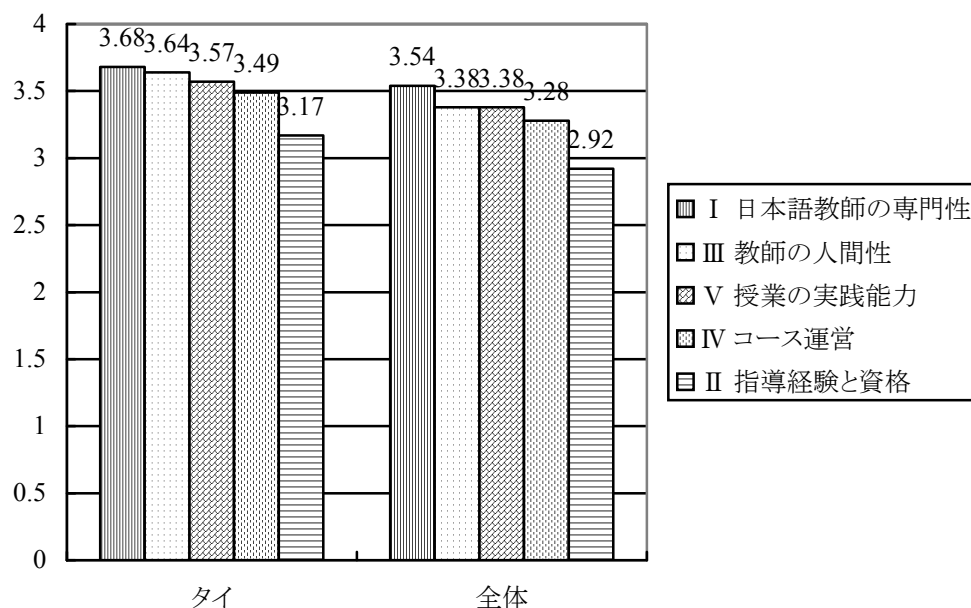


図4 タイと全体の因子の平均

図4から、タイの5因子のうち、最も高かったのは、「Ⅰ 日本語教師の専門性」(平均=3.68)であった。次いで平均の高い順に「Ⅲ 教師の人間性」(平均=3.64)、「Ⅴ 授業の実践能力」(平均=3.57)、「Ⅳ コース運営」(平均=3.49)となった。最も低かったのは、「Ⅱ 指導経験と資格」(平均=3.17)であった。このことからタイの日本語学習者は、教師に高い専門性や指導能力を求めるとともに、明るさや優しさという人間性も重視していることが示された。一方、教師の指導経験や資格については専門性や人間性と比較してあまり重視していない可能性が示唆された。

この結果を全体と比較すると、タイでも全体でも因子の平均が最も高かったのは、「Ⅰ 日本語教師の専門性」であり、最も低かったのは「Ⅱ 指導経験と資格」であった。このことから、タイの日本語学習者も各国の日本語学習者とはほぼ同じ特徴を持っており、教師の指導経験や資格よりも専門性を重視していることが示唆された。

# 学習者が求める日本語教師の行動特性（3） －ベトナムの大学生の場合－

Do Hoang Ngan（広島大学大学院生）

## 1 調査の背景

ベトナムでは、英語などと比べると日本語教育は遅れて展開された。1973年にハノイ外国語大学、ハノイ貿易大学で日本語教育が始まり、その後日本との経済交流、文化交流等の拡大を反映して他の国立大学や私立大学でも日本語教育が実施されるなど年々学習者は増加している。1999年の海外日本語教育機関調査結果によれば、ベトナムの日本語教育実施機関数は31校（初・中等教育機関1校、高等教育機関13校、学校教育以外の機関17校）、学習者数10,106（初・中等教育18名、高等教育2,353名、学校教育以外7,735名）であった。高等教育機関においては、日系企業等への就職を目的とする学習者が増えているが実務で使える能力に達する者は少なく、ベトナム人日本語教師の教授能力の向上が望まれている（国際交流基金 <http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/1999/vietnam.html>）。

## 2 調査の概要

### 2.1 調査の目的

本稿の目的は、以上のような特徴を持つベトナムの日本語学習者が求める日本語教師の行動特性を明らかにすることである。

### 2.2 調査対象者

調査対象は、ベトナムの3大学に在籍する学習者247名で、欠損値を除去した結果、189名のデータが分析対象となった。有効回答率は76.51%である。調査対象者となった189名の属性を表8に示す。表8から、学習歴は、平均2年3ヶ月、滞日経験有りの学習者は8名、無しの学習者は181名であった。

表8 調査対象者の属性

| 母 語   | 性 別 |      | 学 習 歴 | 滞 日 経 験 |      |
|-------|-----|------|-------|---------|------|
|       | 男   | 女    |       | 有       | 無    |
| ベトナム語 |     |      | 平均    |         |      |
| 189名  | 23名 | 166名 | 2年3ヶ月 | 8名      | 181名 |

### 2.3 調査方法

各調査対象校で共同研究者・調査協力者が授業の一部を割いて調査を実施し、その場で回収する方法を採った。調査用紙と回答方法については、第I部「3.4 調査方法」及び末尾にある「資料」を参照のこと。

### 3 結果と考察

ベトナムと全体の因子ごとの平均を図5に示す。

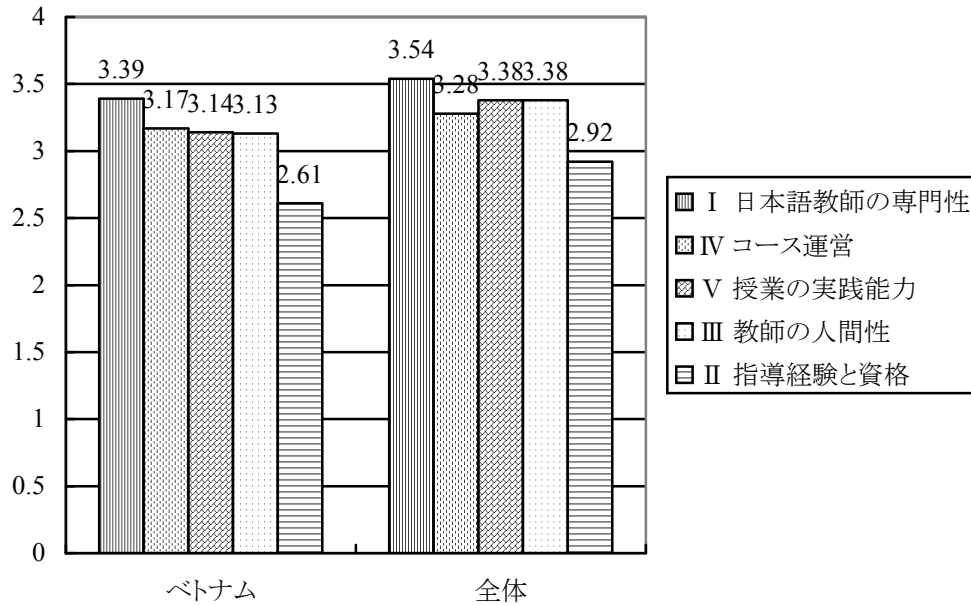


図5 ベトナムと全体の因子の平均

図5から、ベトナムの5因子のうち、最も高かったのは、「I 日本語教師の専門性」(平均=3.39)であった。次いで平均の高い順に「IV コース運営」(平均=3.17)、「V 授業の実践能力」(平均=3.14)、「III 教師の人間性」(平均=3.13)となった。最も低かったのは、「II 指導経験と資格」(平均=2.61)であった。このことからベトナムの日本語学習者は、教師に高い専門性や指導能力を求めるとともに、明るさや優しさという人間性も重視していることが示された。一方、教師の指導経験や資格については専門性や人間性と比較してあまり重視していない可能性が示唆された。

この結果を全体と比較すると、ベトナムでも全体でも因子の平均が最も高かったのは、「I 日本語教師の専門性」であり、最も低かったのは「II 指導経験と資格」であった。このことから、ベトナムの日本語学習者も各国の日本語学習者とほぼ同じ特徴を持っており、教師の指導経験や資格よりも専門性を重視していることが示唆された。

謝辞 調査実施にご協力くださった Giang Thi Thanh Nha さん、Pham Thu Huong さん、Hong Ngoc Nguyen さんに心から感謝申し上げます。

# 学習者が求める日本語教師の行動特性（４）

## －韓国の大學生の場合－

佐藤礼子（日本学術振興会特別研究員）  
馬場良二（熊本県立大学）  
坂口昌子（京都外国語大学）  
田淵咲子（韓国祥明大学校）  
宋致華（韓東大学校）  
恩塚千代（高麗大学）

### 1 調査の背景

韓国の大学では、1965年の日韓国交正常化に前後して、4年制大学に日本語が専攻科目として設置され始め、70年代以降、大学院修士課程や2年制大学における観光学科が設置されるなど日本語教育が盛んに行われている。2004年の海外日本語教育機関調査結果によれば、韓国は世界一の日本語学習者人口を擁しており、日本語教育実施機関数は3,333校（初・中等教育機関2,527校、高等教育機関269校、学校教育以外の機関537校）、学習者数は894,131名（初・中等教育780,573名、高等教育83,514名、学校教育以外30,044名）であった。大学などの高等教育機関においては、就職に有利になるという社会的な要因とともに、近年では日本文化や社会への関心が学習動機となる傾向があると指摘されている（国際交流基金 <http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/korea.html>）。

### 2 調査の概要

#### 2.1 調査の目的

本稿の目的は、以上のような特徴を持つ韓国の日本語学習者が求める日本語教師の行動特性を明らかにすることである。

#### 2.2 調査対象者

調査対象は、韓国の3大学に在籍する学習者342名で、欠損値を除外した結果、296名のデータが分析対象となった。有効回答率は86.54%である。調査対象者となった296名の属性を表9に示す。表9から、学習歴は平均2年7ヶ月で、滞日経験がある学習者は97名、無い学習者は199名であった。

表9 調査対象者の属性

| 母語  | 性別  |      | 学習歴         | 滞日経験 |      |
|-----|-----|------|-------------|------|------|
|     | 男   | 女    |             | 有    | 無    |
| 韓国語 | 75名 | 221名 | 平均<br>2年7ヶ月 | 97名  | 199名 |



### 2.3 調査の方法

各調査対象校で共同研究者・調査協力者が授業の一部を割いて調査を実施し、その場で回収する方法を採った。調査用紙と回答方法については、第I部「3.4 調査方法」及び末尾にある「資料」を参照のこと。

## 3 結果と考察

韓国と全体の因子ごとの平均を図6に示す。

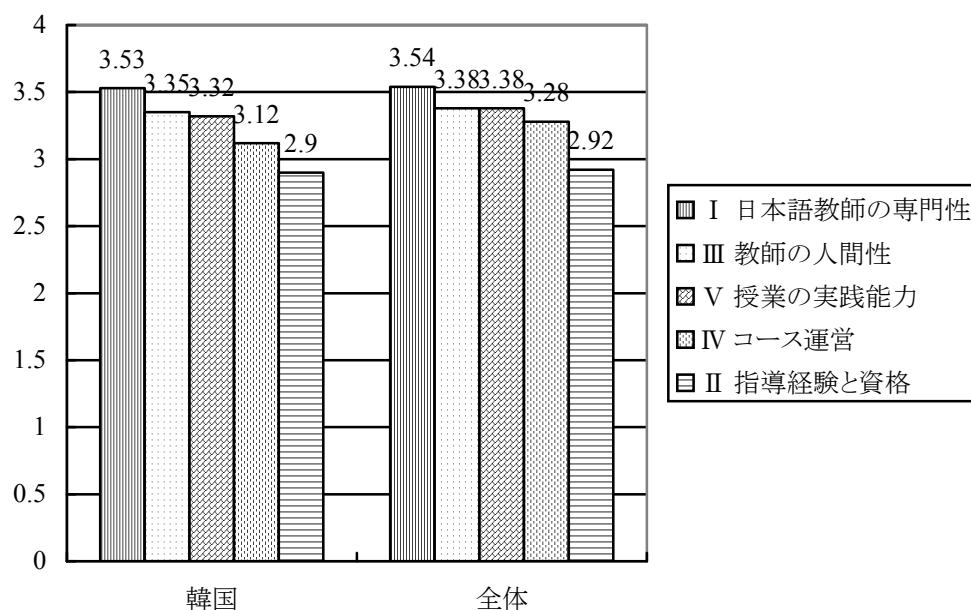


図6 韓国と全体の因子の平均

図6から、韓国の5因子のうち、最も高かったのは、「I 日本語教師の専門性」(平均=3.53)であった。次いで平均の高い順に「III 教師の人間性」(平均=3.35)、「V 授業の実践能力」(平均=3.32)、「IV コース運営」(平均=3.12)となった。最も低かったのは、「II 指導経験と資格」(平均=2.9)であった。このことから韓国の日本語学習者は、教師に高い専門性や指導能力を求めるとともに、明るさや優しさという人間性も重視していることが示された。一方、教師の指導経験や資格については専門性や人間性と比較してあまり重視していない可能性が示唆された。

この結果を全体と比較すると、韓国でも全体でも因子の平均が最も高かったのは、「I 日本語教師の専門性」であり、最も低かったのは「II 指導経験と資格」であった。このことから、韓国の日本語学習者も各国の日本語学習者とほぼ同じ特徴を持っており、教師の指導経験や資格よりも専門性を重視していることが示唆された。

# 学習者が求める日本語教師の行動特性（5）

## －中国の大学生の場合－

小林明子（広島大学大学院生）  
中川良雄（京都外国語大学）  
馬場良二（熊本県立大学）  
鹿内馨（湖南師範大学）  
折坂貴美子（広東外語外貿大学）  
韋立新（広東外語外貿大学）  
王霜（蘭州理工大学）

### 1 調査の背景

2004年の海外日本語教育機関調査結果によれば、中国国内の日本語教育実施機関数は866校（初・中等教育機関302校、高等教育機関405校、学校教育以外の機関159校）、学習者数は388,284名（初・中等教育79,661名、高等教育205,841名、学校教育以外102,782名）であり、大学などの高等教育機関での教育が最も盛んである。高等教育機関における日本語学習理由は、将来の就職のため、日本の科学技術を学ぶためというものが多い。中国の日本語学習者の特徴としては、中・上級レベルに到達する学習者が多いこと、日本語能力試験の受験者が毎年増加している点が挙げられている（国際交流基金 <http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/china.html>）。

### 2 調査の概要

#### 2.1 調査の目的

本稿の目的は、以上のような特徴を持つ中国の日本語学習者が求める日本語教師の行動特性を明らかにすることである。

#### 2.2 調査対象者

調査対象は、中国の4大学に在籍する学習者308名で、欠損値を除外した結果、269名のデータが分析対象となった。有効回答率は88.88%である。調査対象者となった269名の属性を表10に示す。学習歴は平均2年6ヶ月で、滞日経験有りの学習者は3名、無し  
の学習者は266名であった。

表10 調査対象者の属性

| 母 語 |     |       | 性 別 |      | 学 習 歴  | 滞 日 経 験 |      |
|-----|-----|-------|-----|------|--------|---------|------|
| 中国語 | 韓国語 | モンゴル語 | 男   | 女    | 平均     | 有       | 無    |
| 86名 | 2名  | 1名    | 68名 | 201名 | 1年11ヶ月 | 3名      | 266名 |

### 2.3 調査の方法

各調査対象校で共同研究者・調査協力者が授業の一部を割いて調査を実施し、その場で回収する方法を採った。調査用紙と回答方法については、第I部「3.4 調査方法」及び末尾にある「資料」を参照のこと。

## 3 結果と考察

中国と全体の因子ごとの平均を図7に示す。

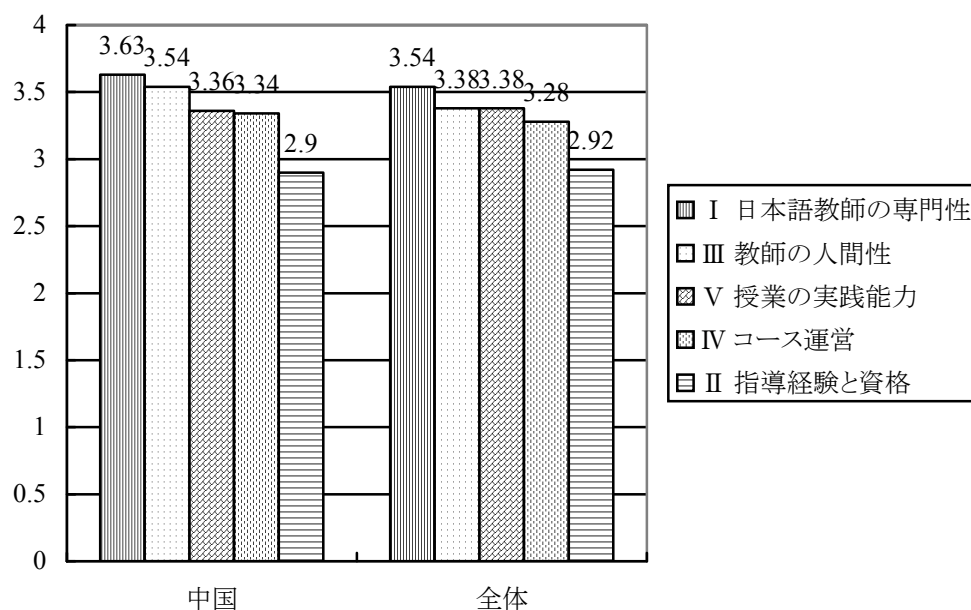


図7 中国と全体の因子の平均

図7から、中国の5因子のうち、最も高かったのは、「I 日本語教師の専門性」(平均=3.63)であった。次いで平均の高い順に「III 教師の人間性」(平均=3.54)、「V 授業の実践能力」(平均=3.36)、「IV コース運営」(平均=3.34)となった。最も低かったのは、「II 指導経験と資格」(平均=2.90)であった。このことから中国の日本語学習者は、教師に高い専門性や指導能力を求めるとともに、明るさや優しさという人間性も重視していることが示された。一方、教師の指導経験や資格については専門性や人間性と比較してあまり重視していない可能性が示唆された。

この結果を全体と比較すると、中国でも全体でも因子の平均が最も高かったのは、「I 日本語教師の専門性」であり、最も低かったのは「II 指導経験と資格」であった。このことから、中国の日本語学習者も各国の日本語学習者とほぼ同じ特徴を持っており、教師の指導経験や資格よりも専門性を重視していることが示唆された。

# 学習者が求める日本語教師の行動特性（6） —台湾の大学生の場合—

顔幸月（世新大学）

## 1 調査の背景

2004年の海外日本語教育機関調査結果によれば、台湾では日本語は英語に次いで学習者が多い外国語であり、その内最も多いのが大学などの高等教育機関で学ぶ学習者である。台湾国内の日本語教育実施機関数は435校（初・中等教育機関175校、高等教育機関145校、学校教育以外の機関115校）、学習者数は128,641名（初・中等教育36,597、高等教育75,242、学校教育以外16,802名）である。近年、台湾の若者の中で日本文化に対する興味が高まっており、高等教育機関ではより実用的な日本語能力の養成を目的とする応用日本語学科の新設が多くなっていることが特徴として挙げられている（国際交流基金 <http://www.jpff.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/taiwan.html>）。

## 2 調査の概要

### 2.1 調査の目的

本稿の目的は、以上のような特徴を持つ台湾の日本語学習者が求める日本語教師の行動特性を明らかにすることである。

### 2.2 調査対象者

調査対象は、台湾の大学1校に在籍する学習者171名で、欠損値を除外した結果、153名のデータが分析対象となった。有効回答率は89.47%である。調査対象者となった153名の属性を表11に示す。表11から、学習歴は平均2年6ヶ月で、滞日経験有りの学習者は18名、無しの学習者は135名であった。

表11 調査対象者の属性

| 母語  |     |     |                      | 性別  |      | 学習歴   | 滞日経験 |      |
|-----|-----|-----|----------------------|-----|------|-------|------|------|
| 北京語 | 台湾語 | 客家語 | 北京語+その他(台湾語、客家語、広東語) | 男   | 女    | 平均    | 有    | 無    |
| 86名 | 2名  | 1名  | 64名                  | 30名 | 123名 | 2年6ヶ月 | 18名  | 135名 |

### 2.3 調査の方法

各調査対象校で共同研究者・調査協力者が授業の一部を割いて調査を実施し、その場で回収する方法を採った。調査用紙と回答方法については、第I部「3.4 調査方法」及び末尾にある「資料」を参照のこと。

### 3 結果と考察

台湾と全体の因子ごとの平均を図8に示す。

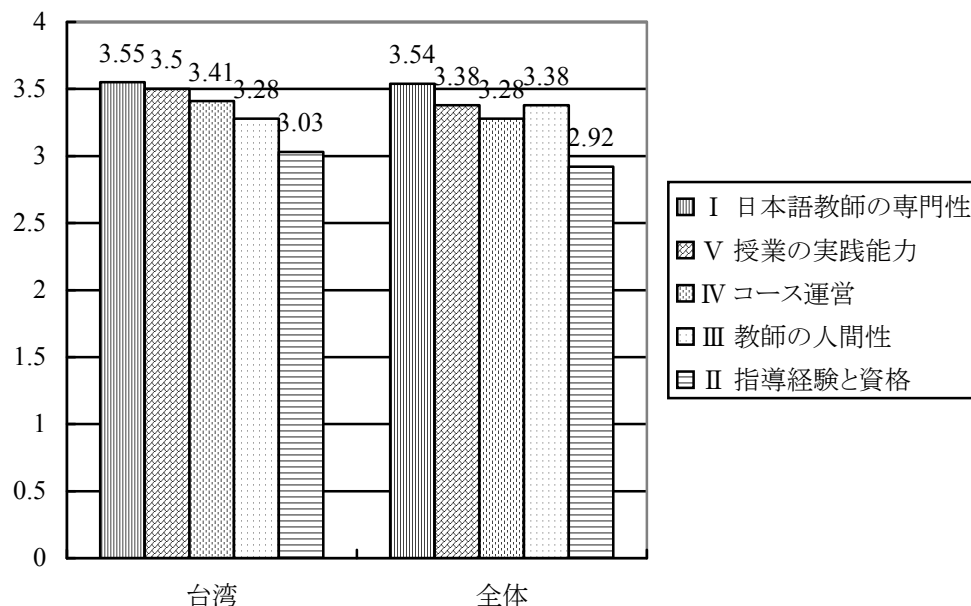


図8 台湾と全体の因子の平均

図8から、台湾の5因子のうち、最も高かったのは、「I 日本語教師の専門性」(平均=3.55)であった。次いで平均の高い順に「V 授業の実践能力」(平均=3.50)、「IV コース運営」(平均=3.41)、「III 教師の人間性」(平均=3.28)となった。最も低かったのは、「II 指導経験と資格」(平均=3.03)であった。このことから台湾の日本語学習者は、教師に高い専門性や実践能力を求めていることが示された。一方、教師の指導経験や資格については専門性や人間性と比較してあまり重視していない可能性が示唆された。

この結果を全体と比較すると、台湾でも全体でも因子の平均が最も高かったのは、「I 日本語教師の専門性」であり、最も低かったのは「II 指導経験と資格」であった。このことから、台湾の日本語学習者も各国の日本語学習者とはほぼ同じ特徴を持っており、教師の指導経験や資格よりも専門性を重視していることが示唆された。

謝辞 調査実施にご協力くださった輔仁大学の坂元さおり先生、黄瓊慧先生、邱明麗先生、徐雪蓉先生に心から感謝申し上げます。